

閉会の挨拶 栃木県済生会支部長 中里勝夫氏

ご来場の皆様方には最後まで第5回生活困窮者問題シンポジウムにお付き合いをいただきまして、大変ありがとうございました。

本日は「子どもの貧困は誰のせい？」と題しまして、下野新聞社の山崎先生による基調講演に始まり、相談、援助等の第一線でご活躍の皆様によるシンポジウムをお届けしてまいりました。これらのプログラムを通しまして、先ほど来皆様のご発言がございましたとおり、子どもの貧困は誰かのせいにするべきものでなく、われわれ一人ひとりが自分の問題として向き合い、真剣に考えていかなければならない問題であるということを改めてご認識いただけたのではないかと考えております。ご協力をいただきました講師、シンポジスト、そしてコーディネーターの皆様には心から感謝を申し上げます。

さて私ども済生会は、冒頭の炭谷理事長のご挨拶にもありましたとおり、創設以来の使命として、生活困窮者に対する支援に取り組んでまいりました。今日では全国の済生会支部におきまして、それぞれの地域特性に応じたさまざまな支援策が講じられており、大きな成果を収めているところです。

私ども栃木県済生会を例にとりますと、昨年度宇都宮乳児院の中に児童家庭支援センター「にこにこ広場」を、宇都宮病院の中に性暴力被害者サポートセンター「とちエール」をそれぞれ立ち上げたところです。先ほど来ご紹介がありましたが、それぞれ児童虐待、発達障害の問題、あるいは性暴力被害に対する相談・援助等に携わっておりますが、これらの事業実績を見てみると、やはり生活困窮の問題と無縁ではありえないということを感じています。栃木県支部としても今後ともこれらの生活困窮者に対する支援と合わせて、相談・援助体制の充実にも努めてまいりたいと考えております。ご来場の皆様方にもどうぞお力添えを賜りますよう、よろしく願い申し上げます。

さらに今般の社会福祉法改正に伴い、私ども社会福祉法人にはより積極的に地域貢献策に取り組むことが求められています。本日の子どもの貧困の問題は、その意味でまことに時宜を得たタイムリーなテーマではなかったかと思っております。シンポジウムの開催にご尽力をいただきました皆様方に敬意を表しますとともに、今回のプログラムを通して子どもの貧困問題に対する理解がさらに促進され、問題の解決に向けた新たな一歩を踏み出す契機となりますこと、また関係機関相互の連携がさらに深まりますことを心からご期待申し上げまして、閉会の挨拶に代えさせていただきます。本日はまことにありがとうございました。